



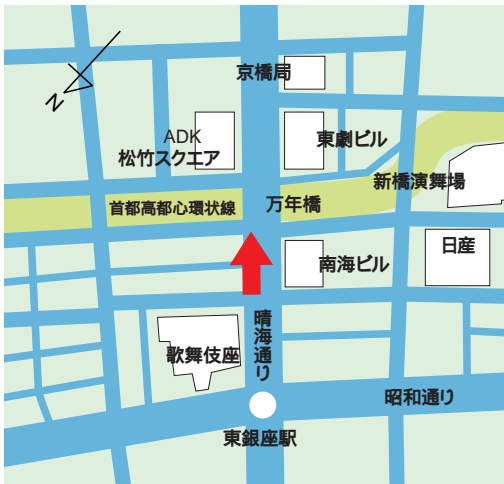
# 消えた街角・富岡畦草・記録の目シリーズ 昭和36年築地万年橋界隈

戦国時代末、太田道灌の居館を引き継いだ徳川家康は、一六〇三年、ここに幕府を設け天下に号令し、城下町の建設に着手した。以来、江戸三百年にわたる都市建設は、後世に高く評価されている。

その基点である江戸城は、当初日比谷入江と称する海に臨んだ武蔵台地の肩に位置し、入江を隔てて隅田川など中小河川が運ぶ砂州が望まれた。そこで家康は、まず日比谷入江を埋め立てて城下町建設に望んだ。その造成地は、大名屋敷、武家屋敷にあてられ、現在の日比谷丸の内、大手町のオフィス街にあてはまる。そして砂州と帯化した地に、日本橋、有楽町、新橋といった商業地を整え、さらに海に向かって拡大を図り、京橋、銀座の町が形づくられていった。この営々と重ねた努力で、江戸はかつてない大規模な城下町に成長し、一七〇〇年代末には、百万人の大都市を実現した。こうして官民等しく太平の世を享受しているとき、突然一八

五三年、浦賀に來航したペリー率いる米國艦隊の開國要求に日本中が揺さぶられた。しかもこれを契機に相次ぎ迫る列強國の修交通商條約を拒みきれず、ついに一八六八年に幕府は條約締結、横浜港を開いた。そして横濱、関内と江戸築地に、治外法權の外國人居留地も設置した。その江戸築地は、まったくの新天地ではなく、一六五七年明曆の大火で焼失した本願寺の移転先として、すでに信徒たちによつて埋め立てられていた。それをもとに次第に整備し、大名屋敷、武家屋敷も建ち並ぶ町となり、幕末には西洋文明の進歩的な受け入れ地にもなつていた。福沢諭吉の慶應義塾も、ここ九州中津藩下屋敷の長屋から始まつた。また、海に接した土地柄、勝海舟らによる軍艦操練所が設けられ、以後の海軍との結びつきをつくつた。

(昭和三十六年三月二十四日撮影)



(平成16年6月30日撮影)

上下の写真中央に写っている建物は、映画館「東劇」の建替前と建替後の姿である。「東劇」の建替は1975年に完成。地下3階・地上19階建の商業複合型オフィスビルの先駆的な存在としてそのシンボル性を確立し、まもなく30年を迎えようとしている。写真下の左側に、わずかに姿を見せているビルは松竹の直営映画館跡に建てられた23階建の「ADK松竹スクエア」。店舗・オフィス、多目的ホール、マンションの複合オフィスビルとして、2年前に完成した。時代の流れとはいえ、小さい頃からここで映画を見ていた私にとっては、思い出の劇場がなくなってしまったのを残念に思う。(文:渡辺邦博)

文 富岡畦草とみおが (けいそう)  
大正15年8月、三重県生まれ 日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員